

松村春輔編輯
松齊吟光畫圖

貞操
明治烈婦傳

東京文永堂



柳田文庫

文庫11

A1747

文庫 11
A 1747

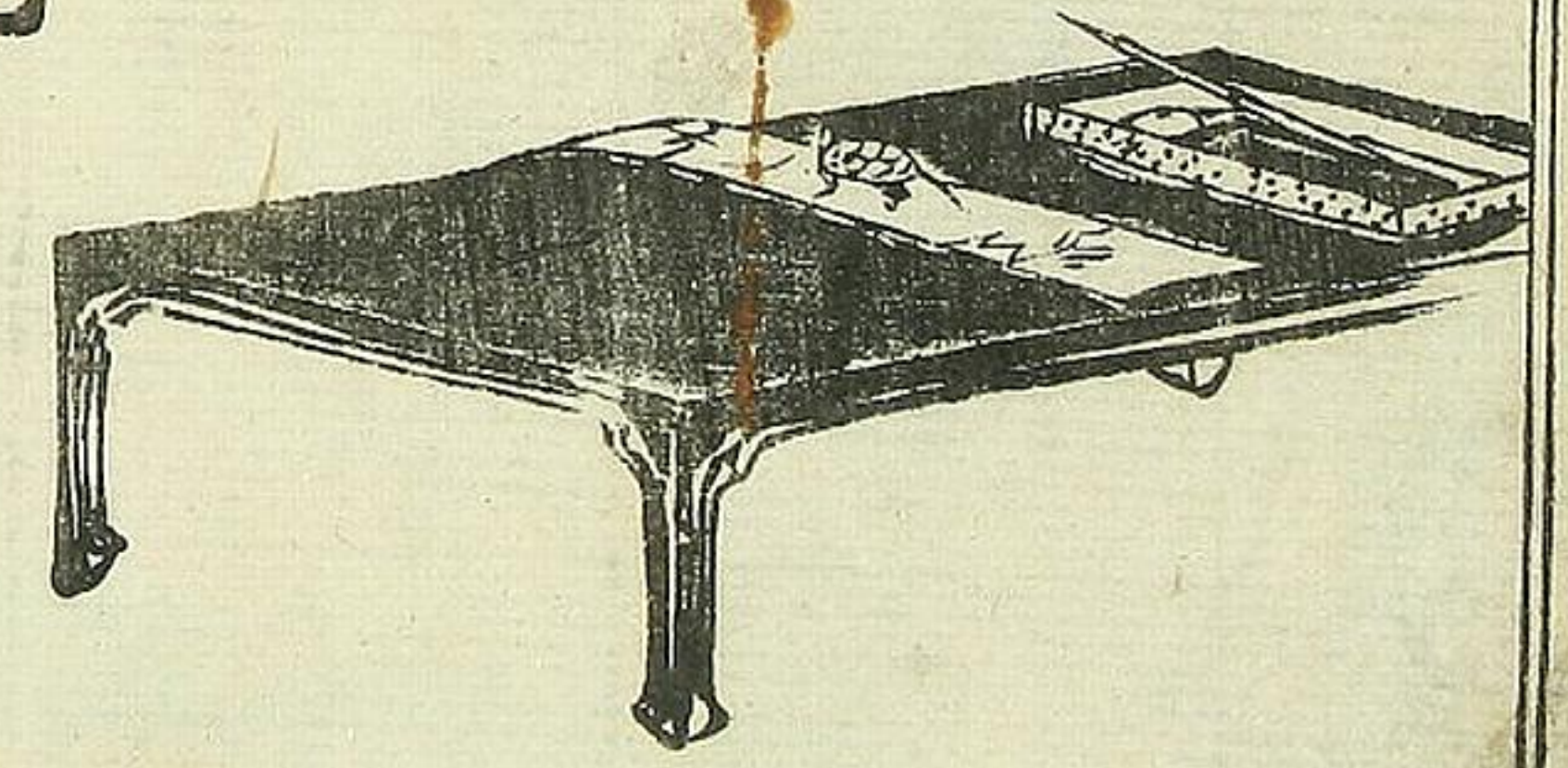


文永堂

梓

明治
採
節義

烈婦傳



書辭ぶんぎ文永堂主人しゅじん松村氏まつむらじが編輯へんぴんしつゝ明治めいじ熱心ねっしん傳でんありやと
了りょう其その淺海せんかい余あまも亦また新編しんぺん編輯へんぴんの間のま上の上の貴殿きでんの
妻さい妾せうより下の細民さいじんの子こ妹まい中ちゆうを若わ貞せい節せつ義ぎののひひ何なにれれ浅安せんあんと
むむたたふふ祀まつりああたたりり。及およ古こととささらら出でるる節せつ義ぎのの人ひと負おんふふのの意いととも
烈れつ婦ふとといいははれれ。激げきししききををななしし。深ひん重じゆうのの中ちゆうににああららははるるははたたしし成せい本ほん
人じん傳でんとといいふふ。題だい浅安せんあんとといいふふ。傳でんとといいふふ。既すでにに節せつ義ぎのの傳でんありし
近きんききににああららははるる。名なもも其その傳でんににああららははるる。固辭こじもも理りををままつつふ
何なにれれ。名なもも其その傳でんににああららははるる。其その故こ由ゆ淺安せんあんとといいふふ。撰せんりり

明治十五年暮書

柳亭種彦識

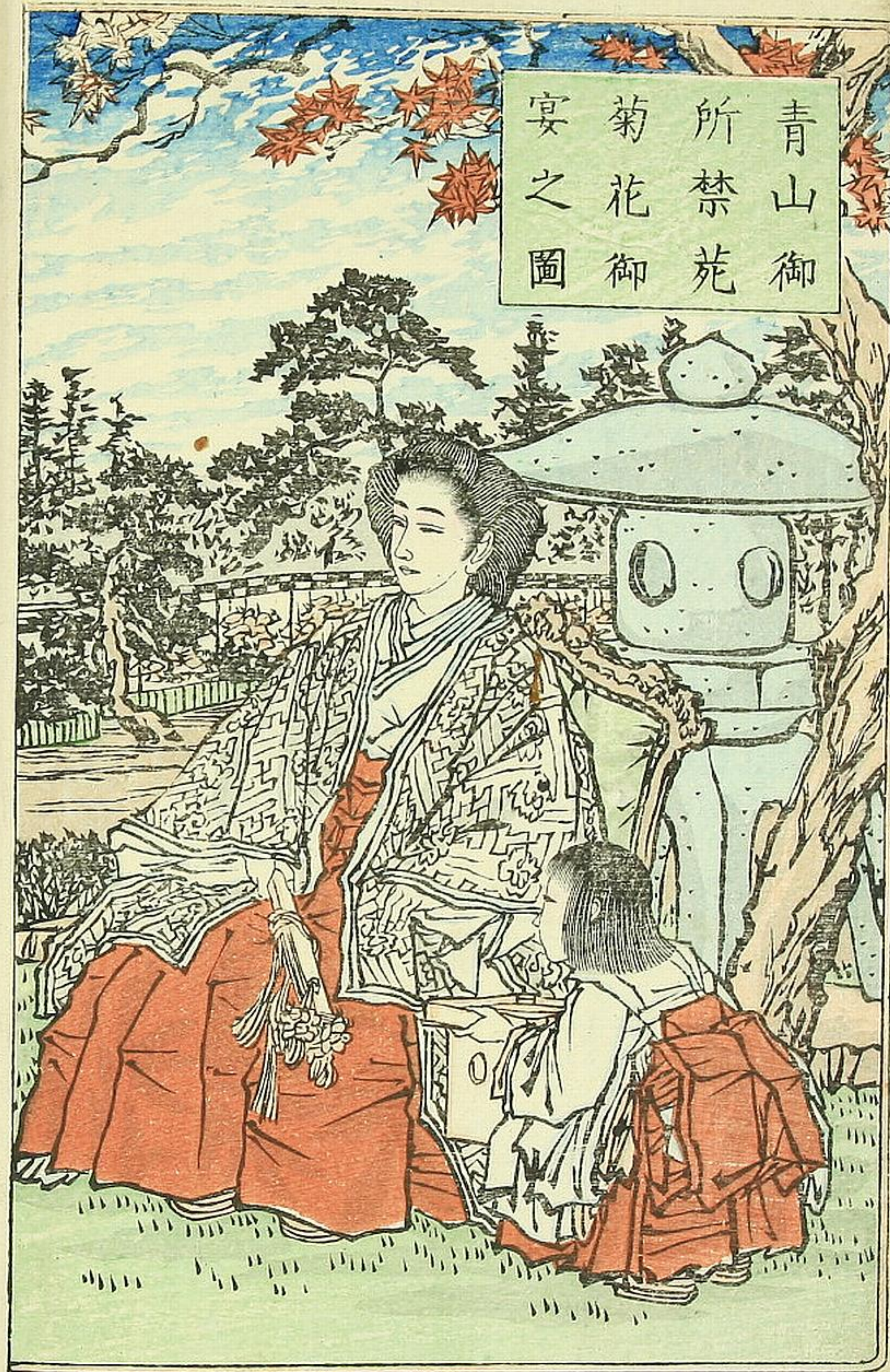
二世偶田了古書



月名二八日



青山御
所禁苑
菊花御
宴之圖



東京女子師範學校生徒授業之圖



竹不改色

君より代のふ代を
後より
長き春の
をこすま
みとり
はなりのま

皇后宮御歌

河水久澄
阿比川の
照らす
みらす
ま

枝本武揚君現今も海
の宮の宮官の官小の小昇の昇進の進
莫の莫谷の谷母の母小の小著の著
家の家ハのハ旧の旧徳の徳川の川家の家のの旗の旗本の本
氏の氏のの女の女なりなり性の性質の質賢の賢ま
通の通トのトむのむ申の申清の清哥の哥やや威の威ま
小の小平の平名の名守の守此の此二の二可の可以の以交の交君
の魯の魯西の西垂の垂ハのハ公の公使の使ととなり
てのて祝の祝儀の儀なりなり玉の玉ふのふ時の時小の小送の送下
まのまこのこるのる古の古詩の詩一の一首の首の内
とのと記の記さのさせのせ物の物なり



榎本武揚君の家

孝の百行の基とて...
不買なる裁格...
天人必老...
浮屠の玉...
父母と四...
まどく...
十家...
始...
母の病...
或日二個...
母の病...

海の内村...
由...
雨の目...
通ふ...
不見...
個の考...
安人...

雲雀
春の門
その名も雪の
久門甚六郎好貞女



秋の襟
久門甚六郎好貞女



月...

芳名通子へ山知下藤町
の湯造高志三存の姉
なり天姓孝行ありて社
父母小信元日所堀某
が津へ入嫁せし小妻の死
去りしより宮家小海
重し後存縁を歎せむ
老母を慰め侍和奇と婦
之進最芳操翁のつ入
る歌名中よ小信をり

多保の太坂府下藤町
堀之橋某が嫁なり幼
より父母小別れ回家
守橋が津小育をまね
生長せしが學業の才小
秀を名高く又西も
の彼不餐餅や棄り百
円の金銭すしめ此世中
小献せんし府藤中女
而や早げしあり
志由まの感賞させん
やけ栄僅ふ十五歩あり

吉岡通子



善と云ひ



梅子の旧屋同僚相合元
 新の女あて九山梅子
 まとちりしつあまの勢
 長家あて開拓所出立の
 御罪とて懲役とちりし
 ちりし長崎女学校の教師
 とちりし夫の罪と宥めん
 とちりしせし甲斐あつて
 終小室補けの寛典とちり
 ちりし編み梅子がぬむり
 政府あもあまれみまひ
 ちりし己のち後佐米氏
 の赤羽の勢所の官吏
 とちりし過去の魂をさ
 ちりし香がまこりちりし

丸山梅子
 後にかき
 通ひて
 夫の
 託
 伏
 書
 信
 た
 よ
 と
 地
 の
 林



きよ代女の西の降盛の書
 ちりし姓賞温茶あし
 能くま小仕へ敢て著受
 と好まむ降盛陸軍大臣
 ちりし小仕せられし時昔日の
 ちりし如く新横と有とちりし家
 政に乱さば西の降盛の役
 降と指揮し武名城
 顯せしが敗軍の後回舎
 ちりし小引きせり選子と養
 ちりし育とせり小初むる
 ちりし実小男女とつべし

西郷嘉代女
 信ら
 夫木
 朽
 て
 秋
 風
 破
 る
 床



おまの... 小僧... 成知... 世々... 起り... 願... 去... 一時... たり... 今... 手... せ... 手... 手...

笑... 聖母... 料理... 切... せ... 由... 助... 久... 月... 素... くの... の... 泥...

川尻豊女



書... その... 茶... 以... 法... 妙... 業...

三芳や園女



散... 花... 袋... 時... 夏... 春...

松女の阿弥徳高の古族来
の女たり存ありて神戸
の妓楼三木素が作の
下婢となりて或日西
敵の抜刀隊なりとて五
六名の破戸物乱入し
盃盤を抛乱し一色小餘
ましと松の彼の曲者
と戦ひ遂ふ所押へて
不迎査も出此阿ししが
中勇性背の板額巴よ
由はまべき傷とまあるん

時の大分初下巻後玉大分
全若西之町の士能田川脩
化の書なり史紙痛不辨り
後小後骨を折きあはれな
らざるや病者の後ふまら
せ車小糸を長壽の各医
と戒の犯後の法正公を奉
信なき一り能く仕え
ひね後八軍交ふ愛る
事なきありてや常と
一々金三四と揚らるる
有まきり田舎小若女お娘
の類多し初下あはれも
愛へるハ可謂實朴の仁
小迫きの所あならん

鳴門松女



かりそめれ
効に
名
さん
言砂の松の
よの道が谷に道ひつ

田川時女



小車乃
わが
て
喜の
かまき
愛らぬ色や
青柿乃糸

口は絹の門と故人の戒め
 眞なるが〜〜〜
 婦小橋りするあり
 備作の三河の玉富村の衆
 妻本某の二女たり生む
 ながら唾あれども志ざ
 廻つて候〜〜〜
 厄害となり〜〜〜
 氣兒丈婦の小兒二人と賭
 一死去せ〜〜〜
 や養育〜十八年のる
 日夜と知るを縁ぎ〜
 感ぜに者なりとて政府
 より賞券と玉をりしとるん

山崎
 紅葉と
 秋風
 結をぬ
 髪のおも
 乱れつ

青木尚子

業の末系秋を赤系
 橋の堀奴小玉向業とひむ
 ね〜〜〜
 栄紀人吹風夜八との八者小
 思をれ互小娘とめつ〜
 夫婦といたり〜
 八の連がさ小〜
 本〜
 き〜
 巨業の金も〜
 業の使害の風あり〜
 ね〜
 の宿光の玉といとん

冷風菊女
 百州の
 仇ど
 し〜
 宿千代〜
 白菊の花

安の信物依久形や中込村
の者なり三平とつ小者の
常とたなり男姑小娘く仕
えの跡十二年累の七十才小
く姑の十九才小く死しや
路く跡き此上へまの更受
善四帝や嘆び向へ者着
せんくくく二平と伴り小
皆四帝の兼て軍務や好
まけりや安の形ふれ
ハ軍務や似ね懸さむる
なんど心心の者来る
小入成倍り薬となん

つちや 去屋安女
そのおや 其親の
このおの 好む物
このら 其
まき 百勝よ少小
やさこ 優しむ



兼の篠原五郎の妹たり
姓末温お且の善頼のひ
えさくは西と櫻
肌渡おて我ひ徳ふ討死
なせーうはち原くその
送敵や麻児胸の枕ふ葬
軍後死後路ふお出れ
仇と復さんと西ふ従
軍や形ひくく原く
依くや伴さくりーうは
是犯なく故やふ敏りし由
まの勇婦と云て可たらん

あめ 篠原兼女
まねか 招き
あか 廉く
みせ 見せ
あき 秋の枝
あか 尾花
いのち 命かりけ

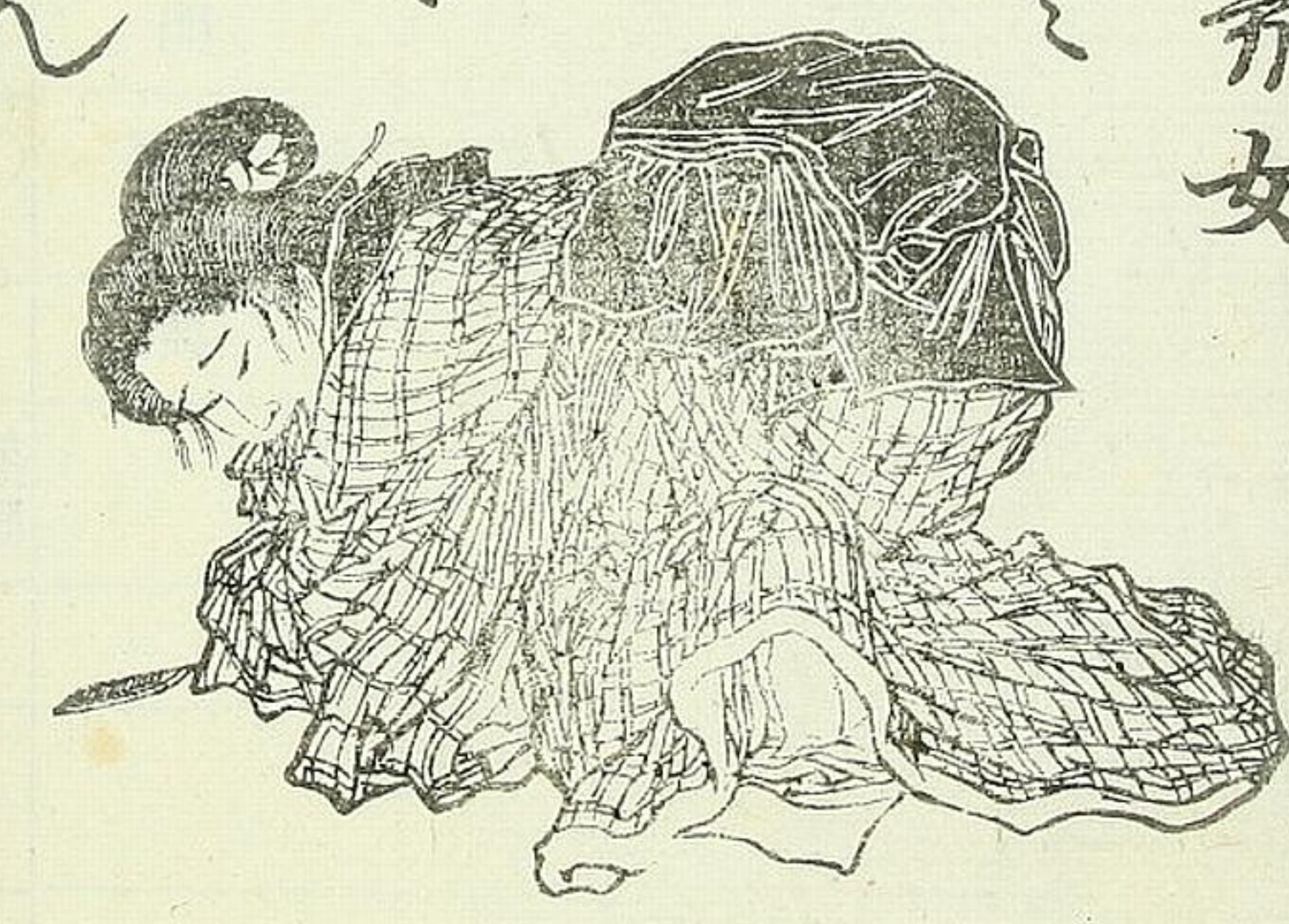


芳い加来後乗とを然知
川津浦村の古族の女たち
一が同族様回正権とま
婦の物となしるるれ
い昔小睦さうさうひ
に難い神風堂のき個を
事破れし後ち自宅小
て扇後せし小芳の想
みの餘り佛の小入り
ふ引き籠居死人の菩提
よのよのあふれ祈り
ふ志ざしと愛せむ
率 阿ふとととらん

宮の群る知り依佐藤林本
村の農坊お舟の長女たち
父の十八才あて懲役の
水ととなりし宮や母の想
し小坊お此極坊お舟の
病氣なるよ 若らつし
うか何とと父の着病致
たきと目く若衆の懲役
ふく遠き路を厭ふを狂い
ぬしふ志ざしと愛せむ
せしれ宿帳けとたう
し由こやが考のの
とくとやのの愛せむ

加来芳女

あふたの
祈し物
神風の
体のため
吹や
通まん



植木宮子

何れ
解る
善の薄氷



日... 小林初女

右の備前の... 川村の平民... 卯葉... 年... 夫... 肉... 小... 家... 小... 登... の...



小林初女... 神掛... ま... う... 怒... 人...

香川... 苗... 二十... 村... 小... 一... 素... 小... 鹿... 何...



香川... 学... 娘... の... 小... 鹿... 何...

月台川... 婦專

日
用
知
女
作


知女は柳川の旧吉原十時盛
 三時が妻なり一か時盛十
 年法に柳孔吉せ一後二子
 向方と柳と養育一柳川
 信濃學校へ通学させ自ら
 修不通信の教授の時い傍小
 ありて之を暇明と取りて
 い雪方舟へ再び教へて教
 育初き届に教書と空し
 小より 柳川より ちる
 小錦一行 雪方舟へ地理
 書と 柳川より ちる

十時知女
 教へて
 中
 賞
 花
 子



柳川は大阪府下西區柳
 本町に在りて昔多分が書
 ぶが支多病ありて高ひ
 小知る事の羅帳ありて浅
 のをいせしを承や大車小箱
 病一自ら 柳川小
 錦の集を仕入れ之を
 ひて賣り 歩行ふ人皆を
 賞や賞一いつか来りて
 待て争ひ 柳川
 今いをたる身となりし小
 天野慈善の公深く貧者
 と助くよありてこそなる由
 金く名標の奇婦なりて

天野
 魚
 酒
 和
 鯛



月
台
以
婦
傳

常ハ神奈川郡ノ久留米
形大志村ノ藤太郎ノ妻也
其ノ中風ノ症ヲ病ミ
癩癩ノ癩病トナリシヤ
二人ノつれや養育シテ
ら能ク勞リシガ或日遊
隙ニテハ何ノ所ニ在リ
如何シ夫ノ權ヲ奪テ絶
やハ小笠原ノ妻トシテ
抱シテ我身ノ油取ヨ
里想ル事小及ビトシ
歎キ悲シクシテ
ト辨ヒ八ヶ峯ノ石をかり
能ク信元トシテ
宮ノ堂金湯トシテ



小湊常女

焼火
たのぬ
秋
な
雪
杓
の
山

近江藝者ヲ猫ト呼び
ある人の流く銭の融
却辛おの源舟の蓮との
由ある者なり 小大坂
新堀の藝妓高子の銭一
業のあたる由
銭一りハ赤トむ小
なり 一ハ赤トむ小
是中谷道里ハ高子
授け志村の妻高子
を受これ例女トナリ
あより 皆ハ小
みだ能ハ人小
れ吉者のみヤ
者ハ



紀伊團楼 高子

の
か
鏡
雲
君

後世の流傳に下萬解形を河
 那の縁戚指す言が女な
 重天性者なり父と親む
 さんみよとよしとせし
 何分貧困なるか一に減
 て父と助りんと遊り子
 ぶき穴なや一が下及子
 と遊る車わきよまを
 感と相し小きひとて恵
 む徳と蓄むた父小遠り
 酒肴の料ふなき一め
 一ハ又少女あゝ感む
 厚き者なりんや

病の秋お惚那の親能能流
 女友七の二女なり母
 病此の後ち續て父の病
 僅小十四女のし女なり
 困貧中や人小存れ
 病せしんあて父が業と末め
 三ヶ年るの病病小全はか
 せしと人々感ぜぬいなりし
 が病は先年ふ身持あて家
 物とあし悔涙の度のは
 あゝ妹が考れせし
 と病き親の不孝なる
 一と海中小舟を投
 して死せりとなん

橋本英森女



親の
 思ひ遠く
 遊びのねつ

國友鶴女



親の
 思ひ遠く
 遊びのねつ

道子ハ山田翁の玄孫にして
田代翁と稱せし家老
の後室なりしヤキ子と
文武の才をなさんと冊
翰不音養し徳ふ色利
氏名はとよとれし空の
寺洞宮戸未とて徳右
の際必ふ器き名と懸
し由備小道子の教そのの
實き小依る物なり又たふ
いふ小和音と称みて秀
徳も字しとせん

宗産道子
雅が電城
かきり
なる
らん
春風小
垣振うのる
若の梅の香



らん女の教習知れ越前
福井町の士族若生夜
なり幼稚時より學ぶを
好むを侍童と養生を
あふ留學中病れの一
も信ありしお悲歎の條
至時長うれとの音と傳せし
なり後ち再縁を結せば
福井女学校の教師となり
福立身と立てま君の家
名と能りしあざしハの治
学女の寺個なりり

若生蘭女
長かきり
行はし
とと
本毛
その形
若の
跡や
らん



約の如仙下伏見深川の
 陶器作五郎吉が長女なり
 父母を明治五年中に死す
 一とて身立の十六のし女
 一とて身立の十六のし女
 五才ふたるは解を自ら
 陶器を化りてとて働ぎ町
 内親族の助と乞へば依
 然とて家格やお積
 まるの感心も嬉しく少女
 小て具の和衣や好む
 武部刀自のし小在りて
 その居居るか

深茶の如女
 瓦焼く糖ハ
 結おれ 軒小
 茶やき
 凍茶ハ



梅い年の所林町の者たり
 夫の十五年來より古あふ
 梅り 乃まのいもなく過さ
 や小梅のまや大切小着
 梅一好夕結松小新世言
 梅さつ積年廿ふるるな
 中志の梅さつ宮小感
 一が女さつ時より茶白と好
 且つ能くまな西甚角堂
 のし小海くて香匂甜ふ

解く
 梅の
 解の
 解の
 解の



係の東京新吉原のお助
 ありて最貧窮の者
 や自ら乞ふてお助となり
 衆家の恵む所にて又
 母を送り傍ら糊口の窮
 や助ふのいせと十二年の
 乙女ありてい感むべき
 や情お裁十五年八月
 病ひふより死せりと
 の子種有切々の結成
 至後小題川

申田孫
 持おぬまて
 子烟の
 猫
 喜れ雨花の
 摺子乃
 花



大僧の尼の西や隆盛の意
 昔住西の大島小座置せし
 せし時窮迫を既小僧
 物ふごも南くしと地障の
 女是と情を己が髪の花枝
 切り髪代をきき金小
 丁時の窮を助より極
 小剃たき中とありり
 西を極本の波ち大老筆と
 たりり一羽女を向へふ
 高小僧んとしひるを
 其老き一を感し金と百
 田を送り一が西の村に
 是法則とありり一とらん

大活尼法障
 平びかを以友も
 浦の香
 筆車憂れ
 月や
 魚
 らん



月名川集傳

月名川集傳

十五

ついで遠州城東郡新田村
 の農山や徳十翁が考わたり
 父の同姓松村の松林松右
 衛門とのみ夫兩翁とも小病
 ひのか小唄れ一かつとつ
 終きつるんさうく医療の
 られとむやみせ一由甲斐
 たきと今ハ云々も解る
 事トと月夜翁が不勉
 強一夫と大率小探
 せり一子友表の長
 子一みふ屋望固
 小福ふよめて近の婦女
 の機をうとつこが花
 々々々々々々々々々々

山下津多



商香
 妻の
 採と
 ねぐ
 ら
 めて
 糸の
 なりひた小

月 洗 原 女 傳
 の平民鈴木五郎の長女
 たり父の先親より後
 あつ小徳ひく母も張満の
 娘ひ小罷り身の徳代常
 春と社々のさる 両親の
 看病ふきりな 田畑の
 耕化ふつるまで 己女の
 ちつあて立七物い笑
 小感む小堪えさる者く
 戸長某より考むの首
 せ上申 せしとなん

鈴木富女



機がたく
 煙の杆小
 む先
 おま
 著るの
 せや
 山かげの麓

安子ハ徳常御吉族を指虫
ハの妹たり明治四年阿部
景器が妻となり一が妻ハ
政府の嫌疑を受け一頂
刃別がる男の入り来り強
く一泊せんと乞ひける妻
の命守らんを拒絶
せし其の若の悪口穿
き逃げきりけり小橋
えんと一其の
疑を承へ面けし其の嫌
疑を承へり一が
風雲牙加入り付せし
く安子由傳小せりとなん

阿部安子



死出の
以てけらふ
枝
味
伴いんせと
是もせと
思ひ切る身ハ

他ハ其の陸軍少将大佐村
字同といふ所の者なり幼
雅に父不別を後ち母不
仕て孝養をり近隣の
若入主と媒妁せんと初
ふふさくいんを不さる
やうな妻と入せし人若
母ハ不孝なるはと縁縁
の出来うぬる人憎なり
還下猶ほせんくを
と云へし人ハ感
舟び入妻の事や云ふ
者方々まき孝順
なる稀婦といふ

福田作女



親ハ
為ル
以
可松
交らぬ巻と
子代も見せつ

房ハ孝義玉下笔為繪面村
 字水之白とらふ所よて平氏
 政三の女をうゝ兩親ふは牙
 三人の身一たるふ父が
 痛中母の死り一ふ身
 二人と煩たり父の看護
 仍ふられとる僅十三才
 小て於く家事や繕ひ一
 不父が病もふさが丹精ふ
 一全ほせ一ハ編ふ長き
 一月と多ふまほせ一
 若養不依るおなうと上
 空不遣一應當を賜とらん

藤橋房女
 牙七細め
 骨我碎
 仕元
 我子
 親乃以のに
 思まん



合せ物のまたるれ物寄角ふ
 不人膝とまひ猶もか為佳
 女の幸なれどもま苦の境
 とちうんまの政事下濃
 今を村養西川養助の書物
 女なり故あつて離縁せ一
 後ち養助をさき木の指う
 爲てふ身の身とちうし
 けき納よりむひて再縁
 一後脚が痛ひと着履
 し甚深切始めより
 かりけとと咬く人惟
 感せざらんせよ由稱
 なる様女ふくと

西川駒女
 うの落のぬ
 ふれ花の
 年
 去我
 嘆息なり



月百八号

歴の身深淵の面影の
新民終末長多末の事なり
十七才の時入嫁し子
一歳し小更の身持放蕩し
て家事を破れし内
惣身持毒の爲不慮に
目の中られぬ事ありて
解つ麻糸をく着て
ふ七年を履て死せし
事のなる事し
一、
ハ

品川橋盛縁
代盛縁が懐妊の縁ち二代
の盛縁と名つる全盛縁中の
並ぶ者なり幼名おとよと云
一、
白寄の路酒をのりて
あや流舟の連とハ時
一、

鈴木辰女

色かへぬ
松や散り
茶の
中



品川橋盛縁

蓮の
赤
うら
月影の
命



ちりへ廣富物や中野小徑
 若き族の田舎和が煙たりの
 孝田宿の茶屋のりーが
 一時茶の棄れられた母
 ともふ大橋小橋の幸助
 間の旗ふひふちりの窮困
 の中より替古やな 或の
 裁縫の貸せんははて着落
 驚くる事なく 空若殿か
 る小舟も憐れむひん 両
 親とも小全枝よる小路の
 茶のりも又盃んふちろ
 一うば今ういふ自由を
 空目とまよも若のり
 あて徳小の落十年中賞賜
 の心海流と紫のりてん



千田細か
 本代芽煮る
 けむり
 細り
 交る
 我の簾に
 淡雪の秋

富の太極斎の勝海舟業
 田中重富の女たり 親三三
 人の誓いたる父の長
 己才の老人のまろ長
 親ひの病小伏せや富の
 孝二十一年の乙女を能く
 孝若きやう一 家主渡辺が
 係るや徳吉や巻く磯や
 男ひま借義や葉の代り
 孝あんと感まへき乙女
 なりとて家主の氣持や
 ねまねく孝まのまを



柴田富女
 老が身なまぐる
 杖にぬる
 竹の
 夕の
 以の毛
 並なり
 りる

月台以婦傳

廿四

日六万の如傳

七三

傾城の雪をうらみ此柳うさ
 堀技をうらむも標をのまこ
 痛みの切なるやと海び系
 舟やぶ城の雪をうらむ
 島村の平民をうらむ
 云女たり一が父おれ
 のち窮迫の中や自らを
 て諸系の子をうらむ
 解放の後ち再びあふ
 里母や安楽小過ぎせん
 て財を金十円をうらむ
 るみ重考はと金盤な
 る多郭中ふかう者
 わり

梅所の長の赤間雲影
 地の蔵技ありか
 杉末杉小窓をうらむ
 愛慕をうらむ
 倉敷業の屋敷をうらむ
 死去せられし梅をうらむ
 や改め飾をうらむ
 此の思ふをうらむ
 堅固小佛をうらむ
 獨なる尾法師をうらむ



向榮樓若鶴女史
 降る雪にみまわ
 み勢
 築
 も
 杉の松り枝
 軒の松り枝



言梅所
 花
 葉
 小雨とわが
 梅の下庵

月名月昇傳

十五

巴 璣 額 へ ち り ー の 勇 輝
 た ら ぬ じ ゃ ぬ ち 後 小 づ ち 産 産
 あ り と 嘆 へ ー の 怨 女 ち り
 麻 呂 清 和 の 士 族 伊 基 虎
 某 の 娘 ち ち 年 十 七 才
 の 時 月 士 族 へ 嫁 せ ー が
 舅 姑 小 嫌 の れ 難 婦 ち ち
 一 づ ち 西 々 々 起
 ち の 日 女 人 際 の 路 ち ち
 皇 后 官 軍 小 松 一 勇
 名 々 頼 せ ー が 西 々 々 故
 死 の 後 ち 何 置 へ ち ち ち
 跡 跡 々 々 々 々 々 々 々 々 々



長 け 静 忌 部 の 吉 房 某 の 女 人
 一 づ ち 神 谷 官 小 嫌 ち 一 男 二
 女 々 儲 ち 一 一 小 嫌 一 長 病
 少 々 活 行 日 小 嫌 一 一 長
 八 日 旅 の 假 ち 一 一 一 働 小
 兄 々 学 校 小 通 学 せ 一 一 働
 ち 一 夫 小 仕 出 ち 一 一 働 小 公
 廳 小 嫌 一 一 長 一 一 働 小 公
 竟 父 一 一 働 小 公 一 一 働 小 公
 の 他 港 ち 一 一 働 小 公 一 一 働 小 公
 全 一 一 働 小 公 一 一 働 小 公
 一 一 働 小 公 一 一 働 小 公



福永越後の花村の太史を
 百系初仕見御道の我い
 破也破也の後蓋田玉司と
 丹小屠後を然も後室の
 義で賢女の字えなきを
 阿り然く家子や梅遠
 子や教育一矢の心や後女
 種とも備んや且お希や書
 取所老の清幽の枕止此
 道や以て風雅の友とせらる

福永越後の花村の太史を
 百系初仕見御道の我い
 破也破也の後蓋田玉司と
 丹小屠後を然も後室の
 義で賢女の字えなきを
 阿り然く家子や梅遠
 子や教育一矢の心や後女
 種とも備んや且お希や書
 取所老の清幽の枕止此
 道や以て風雅の友とせらる

福永越後の後室
 繁述た
 片山甲の
 八重
 秋と赤がせん
 略と流して



蒲田好妹



子然あをねの人に答よりし
 秋も秋みのなほ世ありせむ

松子の婿正三位内閣
 頼朝一考亦戸公の室
 たり始ハ糸紡之本掛
 の藝妓たりしが公まじ
 号小由たまひさり一日
 走の切方と養で海ち室
 とた一たるひが世去の後
 ち善哉の末後古の山乃小菴
 と臨ハ明を在墓茶小徳経
 一ひ望固不あり老海し
 信の藝よ交りざらハ
 ち一めより海ち藝
 女標の信好とらへ登し



城戸松子

松風茂友と結ひて

解とむる

掛の

極の

水月 甚や

初るらん

故中納言松平光愛卿の
 女小一國持命の
 権公使柳原の光愛の
 孫子なり初雅の頃より
 凡流の道と存み歌をま
 紙物書きくも著く眼や
 酒一宗介入召仕のま
 畏も羅遇や蒙るや
 是明治十四年 皇太子
 明宮や内分後ありし
 登上の業譽ありて人
 民一般の敬賀したる
 所なり歌學や著し
 才と徳と風雅たるのみ
 なるは吟刺みて世の
 際らせし一感まきさる



権典侍愛子

首蒲茶

うさる

東

べい

ふくかぜと

あつとくをま

待びし心

はらふ

伊豫大洲の後をわきまに
 吉の女入て越後邑上の
 家へ嫁し成長の後入民
 へ後子ぐさる玉の後意よ
 たり後入中風は懼りし
 右のちや勤るまつり秋の
 れども好めり遠くそと
 歌や兼し左のちよと短
 冊詠多たこと書きし由
 中くふ菜一本年四十五
 六枚なまとも容後の英
 なるかみ廿七八歳と現
 のまどと毫由揺蕩の坪
 や受さるへり標のまら
 ちき所なり

目次

其行ひの感まへまら
 毎年中又が長御付
 越き一箇中集若後
 書字して無りや移り
 其孝養よ兼報あり
 信君の内室とあわがま
 一の上なき事細といふ

雲霧も
 奥田裕子
 か
 ち
 秋の山乃端
 秋の山乃端
 秋の山乃端




ねみ
 ち
 大隈若の室後子
 大隈若の室後子



風みそるに攘夷の念なきん
 なるが成入りて又久之の
 頃より和歌の念なきん
 て頼みたる志の有志と自
 宅み集めたる幕府の
 嫌忌と受て一校路と去
 一が雅部は其功勞
 せ賞されて天竺より原
 く杖助せし是九十有餘
 戈の長考を保ちて明治
 十四年の夏没したるは
 嗣子千畝氏官途み就て
 東条系は在りて西下して
 原く葉後と懸へられり

たりをひしき
高島式
 芦鶴の
 ちとせ
 ふる
 さぬ
 けんを
 かひは
 志なるの
 人やきせらむ



西條の颯風激海を起し
 麻里島の暴徒を城を
 かこみて破陣の勢ひを震
 ふとこ海軍少尉柴田五郎
 君の援兵とて三月十日府
 下にお覆するふ臨み長女
 仲子にまごし一年八月を
 るが父君が出陣を祝して
 門希み見送り此歌とよ
 まれし平素の勉強と
 の稀なる女といふべ
 きなり仲子の其ころは
 川清信守の授の二級生
 みてありしといふ

柴田仲子
 志のくめふ
 前途めて
 西
 のうみ
 そのゆしさを
 りるを嬉しむ



新聞記者中より有名なる
 加藤の長女にして
 築地居留地の女教師。ヤ
 ングマンの塾中に入りガ
 父の未だ新聞中より政治
 と論議する説を載て三年
 の捺獄に處せられたるが
 孝正の跡を踏みて大方な
 び歌を懸み雨よりの風を
 つみ獄中の父のこの意
 ひて此歌を作りて父
 の出獄の後尾振使へ
 傳へし路子のゆみ後て
 加藤は又在りて

ひげいぬの
 犯案の
 主殿の
 阿しつ
 家
 品
 離
 孝
 再
 交
 髪
 留
 入
 て
 る

加藤路子
 庭の面乃
 梅は元
 のみ
 喜
 めけと
 りり男
 喜



肉孫孝子
 長
 あや
 の
 ね



舊仙臺の護士伊達邦監の
 妻ふしと岩手知水海路の
 小学校の教員たり軍齡七
 十三なるは由縁無とて
 天候以来一日由關津なく
 生徒と勵まがた入校ま
 る者日と追て多く知下
 一の學校と成まふ若年
 小津巡幸の際岩倉右府公
 の旅館へおれ磯勢入勉強
 の由敷耳ふ達一思召我
 りて白後一匹と賜り
 一時この歌とよみ
 ありとて

方今歌曲中ふ流りたる
 りのへ清元とて一と
 流かゝるハ二世延喜太
 の長女ふて三世延喜太
 支と習事家とて一初年
 より其業は長たきハ絶
 妙ふして世間一殺の淨福
 禱節と異り品格あり
 入都下の通密を習て
 て技と習事は且是敏は
 て男子は優る事あり
 近世婦人ふして漢語
 せりあるものハ此れ
 どののく權奥とて

だて
 行違ひよる

たのしみとて

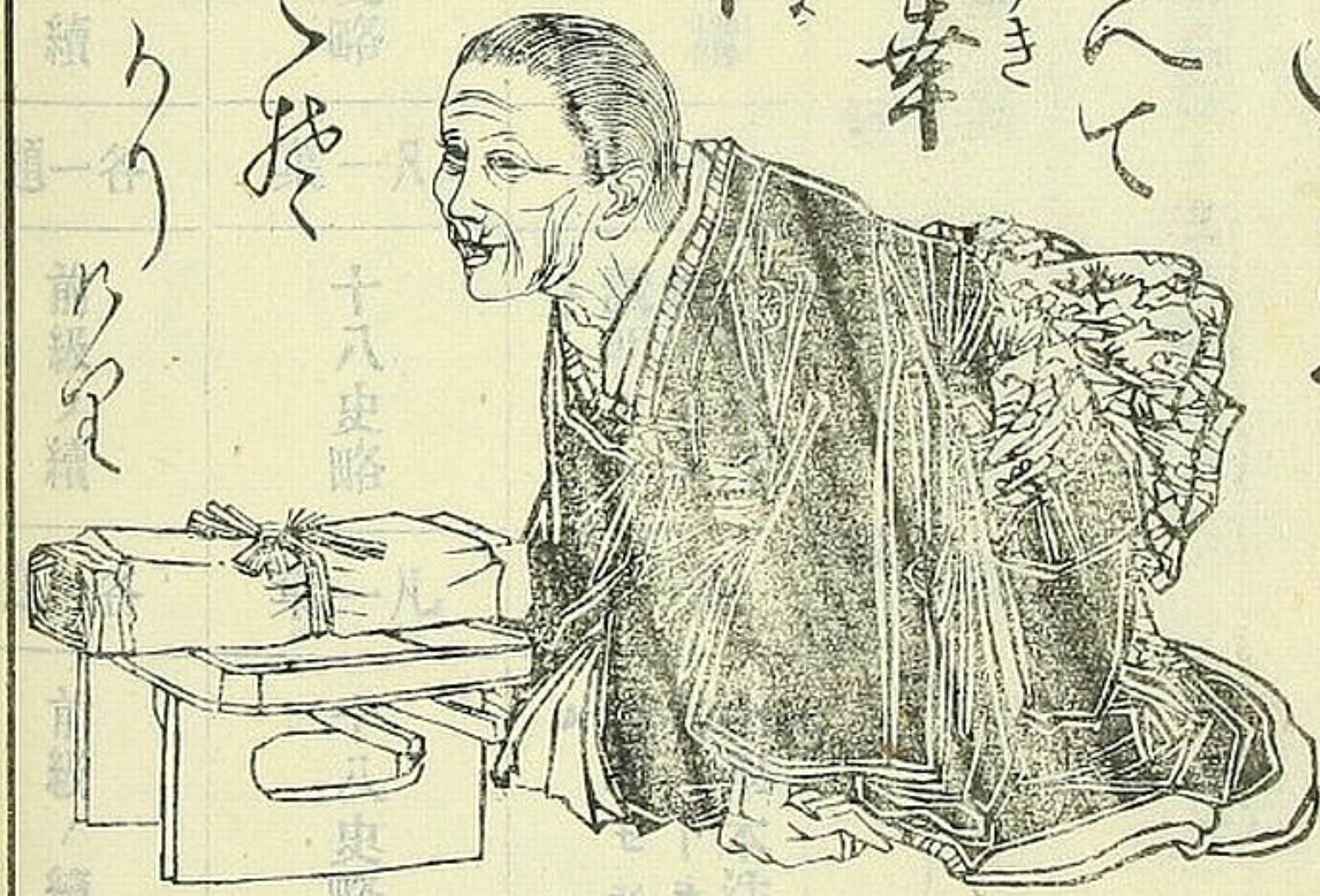
君ら清幸

の汽車

わろ

なみこ

うしろり



一各 葉一凡 葉一凡

清元系子

明のる窓の

音の

人あら

静の

凍雪



信濃玉上井村の農土
 信濃太倉の妻あり良文
 一和軍米國に留学せし
 病に罹りて明治七年二月
 一日郵船アラスカ号に乗
 込め給ひて途中病の回復
 せざると巨額の学費を以
 て業の道せざるを憂ひ
 石巻の羅と悔て太平洋を
 舟と投下たまはか越へ半
 月待しわひなきは怒み
 涙のひまより 救十首の
 舟と投下て亡使し向し
 其途や愛は拳たり

帆足輝子
 野毛山も花
 さき
 たる
 せ
 よとあ
 おみちる
 散
 志



萬葉中時の後知事
 舞系太孫の女ふし
 て多穂区長舞の池田桂
 洞君の母あり早く寡婦
 と成て風雅三昧は遊ひ月
 小唄き花よ眠り平野の
 細帯やおみて秀逸たる
 下と懐きむのころるげ
 汝けまはま君を世のこ
 ろおき向の政や何づり
 て世評よく実は徳明
 伶俐なる内室ふし
 在

池田松月尼
 蓬菜や
 の
 麦
 の
 若
 み
 あり



佐賀の藩士素氏の女...
て風...
と信...
たじ...
と懐...
てま...
浮...
刑...
書...
一と...
小...
又...
て世...



浅倉深藏の妻

山うせの

さくら

ぬ

小我

子

子...
向...
やせん

本芝三丁目の魚...
密の妻...
女...
人...
老母...
区...
紙...
者...
す...
あり...



小川素子

山を

あ

き

着

お

か

下谷 慈泉寺 町小住 出士 族
 玄の 徳 勇 二 女 小 幼 名 小
 幸 二 の 一 八 の 幸 近 藤 の 某
 氏 と 通 下 七 櫛 膠 の 如 く 女
 り 病 死 せ ば 父 の 之 を 若 小
 て 大 喜 ぶ 歎 け ば 幸 が 不 孝
 の 又 之 以 て 父 之 教 養 せ ば
 悔 一 封 の 送 書 之 去 一
 ち 既 下 自 害 せ ん と 一
 たる 母 止 め られ け ば
 心 悔 悟 一 却 却 孝
 心 養 育 一 母 が 長 病 の 侍
 葉 料 小 代 の 所 小 部 角
 海 老 屋 小 牙 之 沈 め ぬ

飛 彈 國 益 田 郡 未 之 筑 摩
 知 ち 一 一 一 同 形 尾 海
 村 の 農 夫 傍 ら 酒 造 と
 小 賣 業 有 る 二 村 清 助 の 妻
 あり 一 夫 清 助 の 子 世
 去 一 初 め の 男 子 三
 人 之 養 育 一 之 毫 も 不 品
 行 なく 明 色 之 柳 娘 之 と
 り 習 ね ば 養 育 せ ば 之 之 帳
 合 一 十 一 年 の 艱 難 の 乃 ち
 亡 夫 之 遺 杖 之 百 余 圓 之 借 金
 一 明 治 五 年 之 至 之 居 完
 酒 席 中 之 養 育 せ ば 一 先 業
 が 勉 力 之 養 育 せ ば 一

藤 本 花 や
 くら
 と 其
 志 色 ぬ
 ひ と 重 垣
 紅 髻 楼 の 娼 妓 白 玉



二 村 栄 子
 美 紫 一 一
 小 糖 一 一
 雲 一 一
 月 一 一
 加 け 月 一 一
 冬 之 山 一 一



鶯坂の尾はぎる波上持の
お屋敷御小僧の宿ふ士族
お直七が娘を一夜先成
押入て直七が面おも又
突つひお直七の金持と
まどいと迫るか余の此時
十の成なり一か交する
手成入抗一救の所の
お直七も負ども藤の
まどい中お直七の勇健
お直七が物もお直七
去たるお直七の
お直七と揚つり一の世
お直七が揚つり一の世
お直七が揚つり一の世
お直七が揚つり一の世

滑替の小説は有名なる
曆八笑人の作者藤野
お直七よ一と初推の時より
英敏なま七七の時画と
文圃女史の學びお直七
お直七の門下入方今着色の
お直七を画きてお直七
お直七の性多能なる
お直七の中井と語り一往來を
お直七の子の屋敷
て風韻雅致小僧の月治
十二年中 皇太后の
お直七の思ひきやの歌
よみつて一とるや

沼野念子



お直七の思ひきやの歌
お直七の思ひきやの歌
お直七の思ひきやの歌
お直七の思ひきやの歌

林芳谷



お直七の思ひきやの歌
お直七の思ひきやの歌
お直七の思ひきやの歌
お直七の思ひきやの歌

小越形を由りて信じて宿願を
 思ふ書の書か若くは継女の
 後樹と云ふに蒙家の妻
 如しては途小して能く
 乞せ給備命を返さば
 て又化の歌小仕へは
 るやかたせの情質温和
 みて眉を望まの御小
 残小お擲まらるるや
 一書はば又小伏て美
 妻小徳母や徳めし
 おべき行ひたりとを
 の某氏を御舟と御送りしと

舊幕の旗下宿願を
 翁老世の妻小和
 歌の山田常典の御舟たり
 書へ老世の風を學びて
 美々々又琴と深き
 妙あり後小本妻と
 幾程も若く老世の
 くのけさば本妻の思小
 賢と徳しや又子小
 連て年所松井御小
 一光世の尾鶴園の文
 字とてりて和歌
 々入小授けて活計と

月名烈婦傳

新葦田のたせふ

くはぬまき風乃

さそく

ちり

花

残

袖小

とらま



鶴久子

み川とまの

園此

草根

あ

みくろふくろ

善の色は



十四

雲物松江母夜叉
 力量男千子孫の
 隣の家へ宿り
 盗み行たる
 衣被難具や風台
 包み隠し去んと
 へおどろかし
 代の夜と起し
 戒と驚きて
 皆言と巻て
 皆言と巻て

漢人の為命なる
 風自は遭ふが
 女初名を
 中盲月と
 小元と
 字樓半
 小元と改め
 也入はま

月台川掃傳



松江の雪子

おつとねる
 雪の
 静か
 日と
 さね
 ねとこえく
 つむかありり



大文字樓半太夫

たるの
 浅る琴の
 若
 花
 ちる
 思ひは

一五

江戸の歌道は、井上文雅の學び有
 名なるが故に、喜作の聘
 さるるまで、徒歌を唱む者
 なく、筆紙を授けて歌を乞
 ふ者多かりしが、文久三年
 八月、水天の舊士武田耕
 富、天狗堂を率いて一海
 橋より、船を乗せ、小
 思、弄せんとして、初て小
 二が、力ふ、鑑や、今、たり
 と、い、ん、此、顛末、の、世、知、ぬ
 儼としてくる、合、意、小、毒、し
 く、載、た、ん、た、ん、ち、の、歌、
 の、舟、中、の、字、あり、今、月、本、
 橋、大、船、あり、て、移、り、と、移、り



へき
 道に
 あり
 ちの杯のかやめ
 松廼門之竹子

書画會へ文化文政の乃ご
 勝、外、文、雅、抱、一、世、の、起、立、ふ
 八、橋、よ、寄、き、し、後、い、ん、の、
 如、き、身、昇、み、流、主、は、後、つ
 て、弘、化、も、承、の、後、米、産、後、
 湖、南、湖、校、筆、墨、の、大、名、の、
 て、堂、画、會、の、盛、ん、な、り、し、時、
 より、勝、八、い、ん、の、筆、は、毎、由
 聘、せ、ら、れ、て、文、人、筆、墨、の、
 雅、意、を、解、し、徒、歌、を、喜、
 せ、ま、て、鑑、考、を、雅、の、ま、の、
 妙、あり、明治、十四、年、日、所、
 吉、川、町、小、橋、合、衆、會、を、
 開、き、て、大、衆、と、な、ら、る



歌妓房八
 静なる
 あり
 あり
 画小かく流の
 系もと筋小

ちをけんりつたのたまきききき
 千紫のり上徳は望院郡
 芽解村の農松平四郎八の
 長女なり月治九年の庚
 子年十一月に学問修業の
 為又とて東条赤坂へ
 寄留せしが幼雅より
 秀才なるを愛し平歌
 皮の郷へ根を懸く小
 ての高き奇よ一に
 自遊由まのめなる気
 の女童の及ぶ所なり
 實けぬくの歌の記者
 彦が引学難志といひ
 と發行せしとき花初
 換てわらわれしなり

松本魚沼子

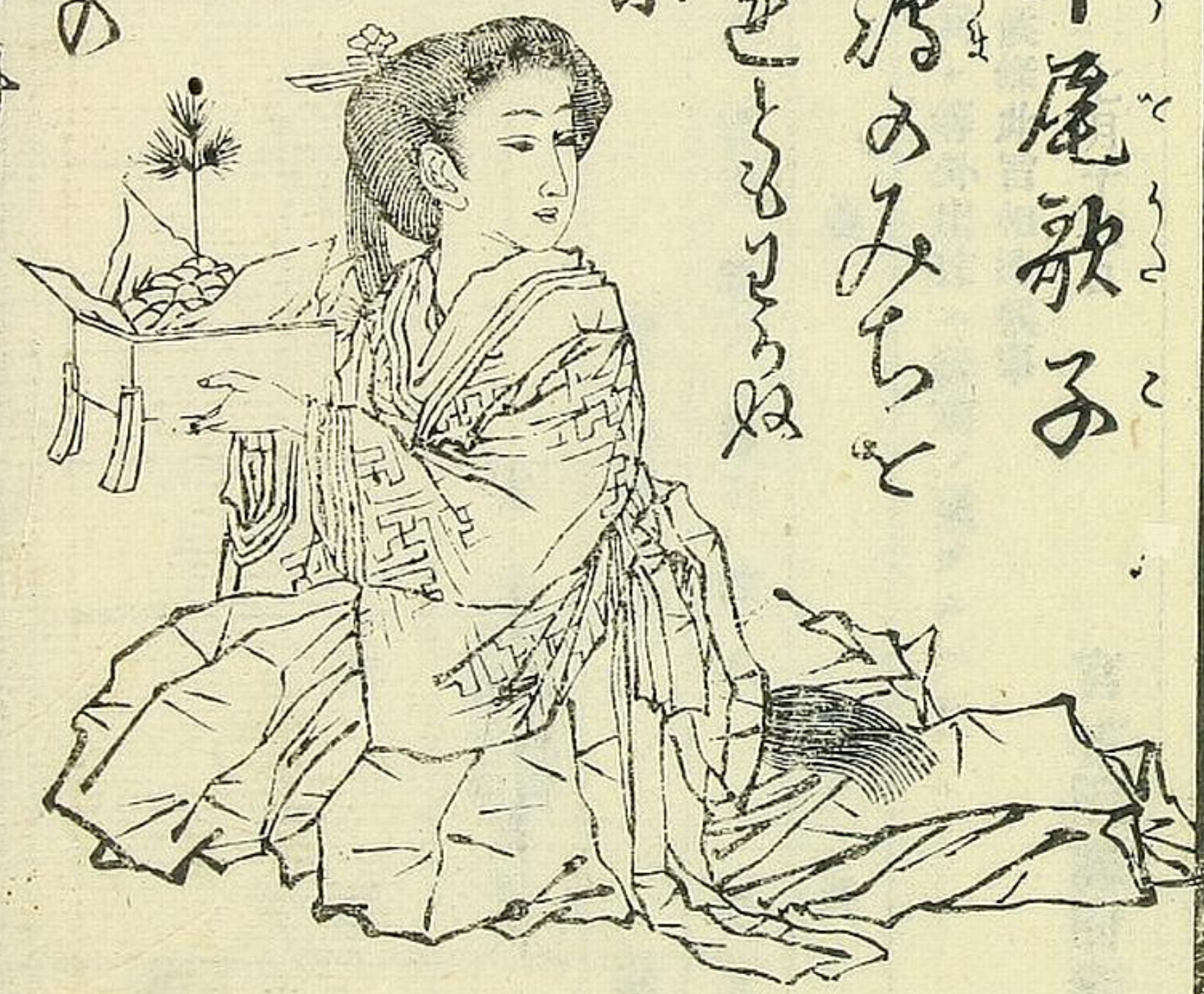
閑けゆく
 ままひめ
 みちね
 とふ人の
 らの約り
 とむと終る



きつちのちの尾士平尾謙
 の女なるが幼年より
 幼よしとて学問の
 妙なる一日よ一頁の
 題を解る由寄居たり
 延原申松平の春河りし
 ときしとて海古き
 歌教を習ふなり又水戸
 照淵は松平のとき
 首の徳歌河り月治九年
 乙未十一月五年に
 仕やるまは初めて
 の目あやの終りしなり
 不日名を授けしなり
 大内山よきて我名

平尾歌子

雲の
 うけ



近世儒者... 有志... 報... 維新... 岩... あり... て... せり... 幽... の... 杖持...

近世儒者... 有志... 報... 維新... 岩... あり... て... せり... 幽... の... 杖持...

明治川 歸轉

織田氏の妻 淡子



六月... 雨の... 是... 乃... 時... 蜀... 乃... 乃... 乃...

梁川紅蘭



あけや... け... し... 家... す... の... 爰...

猪の極は後通の世の若
 といつく信物保を形上服
 田村農小林平四郎の母
 嫁お美と傍み鞭うらふ
 牛馬の如くたるお美の
 家族八人の居計や
 なぐら猪の洞は遠く
 一筆大福の時直夜着獲
 小力やそーけさお美
 しき猪の心も遠よわ
 ぎ家内睦すくらんま
 多りしお煮の魁林
 と感動せしあや

吾邦一たび外玉の交通
 屏きしうろろ五橋夷の
 説講備一幕府の政務大
 のこ家へけさの水屋猪洞
 吉右衛門父子同関入り
 と求めて橋夷の輪有成
 乞ひしこき村忌へ家
 小な織りて教國の義
 阿りけさの陰密よそ力
 走る所ありしと幕吏の探
 依し遺捕せられて冥途へ
 下さるる刑入獄せられ
 たりしが維新の義
 小降り其後お美
 又後生とす

月名川 歸傳

小林善子
 考れ玉の
 初音
 山の戸
 守もそーや
 思ひるるふ



長橋村岡
 山の名も
 嵐との
 守もそーや
 思ひるるふ



昔遊宮裡焼蘭齋... 林濤面皮... 西条海系の太夫... 妻こたり不幸... 幼る者の五月... 色あつて憂て... 凡の行ひと...



右田恒蓮月

おとそて

若葉

乃末

うさめり

大系山

花れさる風

幕府和宗... 皇國... 賞園... 入朝... の長女... つかさ... 虚弱... の... 踊... 器... お... カ... 殿... と... 娘... 叔...



前田花子

少つ

伏

えの

さる

若のり

かろふ人恋

惟新の婦傳の進歩
 て勢多頼敏の娘女子世小
 多き中よおのり川伊
 勢多町のあふる紙の女
 入校せし風川学校
 入校せし天稔の文士
 極小紙の夜毎小作
 る文章一も可なり
 者又小説稗史の類
 と好みて戯しや格
 ど作り中記者編輯
 せし小学雑誌「投書」
 小奇と格の「解」
 曲字の「娘」
 史一も懐くごら

芝西夜七師の東渡世
 の妻なりし二夜中二人
 白紙と内を糸束
 金織と如せしと
 俗話ハ心怖しと
 所ハ但せんせし
 柳ハ紙の小男
 ちき紙見梅り米
 探り投付けま
 と握てかさこふ
 おいせしと
 力ハ紙の體た
 て組付き変化力
 紙と柳ハ美濃の大井子
 力ハ由増りつべ

月名川 婦傳

村田房子



空見
 花見
 さくらみ

米高の妻郷子



柳
 力ハ紙
 さくらみ
 りんえりり

十三

東条府士族後役跡の妻
 妻一と名義の子二人あり
 長八十八七有まこと育目にて
 吹男へ四女あるも嫁女を養
 育するも実母と違ふり家
 極めて貧しく白川御士族
 同上二英との小者より室
 と貸し給ふ一英中貧若
 成見くまひ忍び金五十円
 と貸与へし一五人へて忍
 びも被ば又一英が借金世
 評盗盗みし多額一銀
 盗署へ拘留中かまへその
 罪と能く小勇ひ一書と選
 ばり代つて自裁せしめ
 ときりの感懐せむるへし

瓶傍の園子
 君り
 深名
 の
 清もせ
 おる命も
 せしめ



甲村柳町の所長山井金
 たるの妻たり 遊馬成
 のつみ入て被殺せしむる
 ののみおふは和漢の歴
 史みこりて秀吉の
 名あれは苗子が敵に居る
 の女子と一宿あはれ近
 軍田御下よそ女工場実
 業の日程図の傍に世
 へ相許ありて万歩小響さ
 頭鳴采とほりりとい
 びふ記を尋ひ月夜中
 五年の事申し被殺始め
 小流遊せしむるなり

山本苗子
 流遊
 久し
 河の
 氏代乃らむのり成る



甲府の書肆内藤信持の
が修母入してを物に
の獨枝なりしとの煙花
ふ在て和漢の香を
歌よむるや好みて
の板女家の如くなる
内藤氏も極て
の思や実家の如く
生れや賜るのみならず
はる玉の涙を
し懐懐の士と深く交り
王政復古の
府の
家傳を起したるも
教への業き

内藤信子
記
思ひ
か
世の中
ま
う



信濃國更科郡
の
夫が
徳
そ
の
山
の
し
よ
及
り
お
り

更科の農婦
山松
乃
千代
く



わが世に... 友達の... 手紙の... 乾んと... 現状... 女が行ひ... 働きたり

半に... 又... 三條... 支那... 刑罰... 月台川... 帰専

秋本久子

荒巻の羽あふ

勢

ひる

芦の花穂

吹ちりみり



跡見花溪

善のまき

子

子よ

雲井ふり

名のみとめ



本世の若者氏もて苦
 秋の月夜に伏見宮の殿上
 人修程の手交筆名女連
 巧い一風小勅の志願
 く奈波の意圖へては度
 徳の著せりては祖傳の
 安軍仲直井正雪の
 王政復古の謀りては
 刑小交せしむる女史の
 其志の烈く懐極の
 或は國難ありしに
 又清舟の舟ありて畏
 望の宮の心作の起りて
 明治十四年十月十日
 入幕の時一歳四十なり

日ノ死ノ如ク

若江薰子
 鳥羽玉の
 やみよ
 とも
 なる死
 く
 玉
 ゆく世に
 末の
 ありし海



元治甲子の秋毛利の玉老
 林岡の迫りて放軍せし
 時故亦及孝公も樹小
 丸舟とよむ幕府の探偵
 又避んと南条三年樹の
 枝幾松があらは伏せし
 玉松(敷)松が
 妹おれは之を隠し
 十日降して幾松の
 丹波路へ移りたるの國小
 義と殉人婦も孝公の
 君の御君とせしなり

山ねりし
 梢の香を
 吹た
 び小松の
 毛わのくえゆ
 森子玉松



月台川、昇尊

七六

日... 女...
 大炊御門...
 山田...
 世...
 山...
 世...
 山...
 世...



浪華史略
 一名難波戦記
 五編近刻
 出版

花鳥山水漫画早引
 葛飾為齋畫
 初編一冊
 二編近刻

上野戦争記
 彰義隊天野八郎遺稿
 半紙本
 全二冊
 鮮齋永曜画

小學用文填字法全冊
 霞峯片桐先生書

赤穂義士烈婦銘々傳
 山々亭有人著
 孟齋芳虎画
 全三冊

近世櫻田記聞
 松村春輔編輯
 半紙本
 全七冊
 月岡芳年画

東京書肆 文永堂
 彌左工門町十三番地
 武田傳右衛門

010190531517

